ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site

特集

生活と身体

2024「路上の身体祭典H!」新人Hソケリッサ!寿町パフォーマンス

vol. 038
2024

特集

生活と身体

a.

b.

レポート1

アオキカク

生に向き合う身体「新人H ソケリッサ!」

野外で裸足で踊ること

横浜は寿町、西日に照らされながら裸足で踊る男性たちがいた。飾り気のないありのままの表現からそれぞれの生きざまが滲(にじ)み出るようだ。彼らは路上生活経験者で構成されたダンスユニット「新人H ソケリッサ!」。ダンサーのアオキ裕キが主宰し、各地でワークショップや公演を行う。この日は歌手の寺尾紗穂がコラボレーションし、その澄んだ歌声は力強いダンスとのコントラストを生み出していた。トークコーナーで寺尾さんからの「劇場と野外どちらで踊るのが好きですか」との問いに、出演者の西篤近(とくちか)さんは「野外のほうが好きです。舞台だと前と後ろが決まっているから、後ろ側はサボってしまうような気がするので」と答えた。主宰のアオキさんは「安心した空間ではなく通行人があり自分たちをまったく知らない人がいて、ときには野次も飛ばされる。そんなヒリヒリした状況で踊ることに得られる視点や発見があります」と言う。その感覚は路上生活をする身体性とかかわっているのだろうか。

生きることに特化した感覚

アオキさんは以前、バックダンサーなどをしていたがアメリカ留学中にテロを経験したことをきっかけに、これまで信じてきた表現や、ダンサーとして目指してきた舞台に疑問をもつようになる。そして帰国後、ストリートミュージシャンの横で堂々と寝ている路上生活者のおじさんの姿を見て強く惹(ひ)き込まれ、一緒に表現をしたいと考えるようになった。アオキさんは「現代を生きる私たちはいつの間にかいろいろなものを抱えて捨てないように生きています。家も財産も捨てて、その日を生きることに特化した路上生活者を見

生活と身体のつながりを捉え、
表現活動を行っているみなさんにお話を伺いました。

レポート1 アオキカク「生に向き合う身体『新人H ソケリッサ!』」

レポート2 un:ten+「女性のエンパワメントを衣服と身体で表現する」

レポート3 Murasaki Penguin「コミュニティと芸術を身体から考える」

d.

c.

a. パフォーマンスの様子

b. メンバーの集合写真
（左上から平川収一郎さん、西篤近さん、アオキ裕キさん、山下幸治さん、左下から渡邉芳治さん、伊藤春夫さん、浜岡哲平さん）

c. パフォーマンスの様子。
コンクリートミキサーが回転するたびに中に入れた石の音が鳴る。そのリズムに合わせてダンスをする。

d. ワークショップの様子。
路上生活経験者もそうでない人も一緒に踊っている。

ていると、見失っていた感覚を呼び起こされます。路上生活が正しいということはないですが、現代の豊かな生活を過信せず、立ち返ってみることも大切ではないでしょうか」と語る。始めはメンバーがなかなか集まらなかったが、ともに身体を動かし対話を重ねていくことで徐々に仲間が増えた。2007年には第1 回公演を開催し、現在まで全国で活動を続けている。そして2022年から簡易宿泊所が集合する寿町にてワークショップを開始。しばらく近隣住民からの参加はなかったが、前述の公演を終えた後の回では「観ていたらやってみたくなった」と参加する人が数人現れたという。

人間性を引き出し、魅せる

ワークショップではその人自身を活かす身体の動きを探ることを重視している。具体的な動きが指示されることはなく、参加者は投げかけられたテーマや言葉に対して自分なりに動いていく。アオキさんは「参加者やメンバーの生い立ちについて聞いたりすることはありません。最近太ったとか、入れ歯を入れたとか、他愛もない話と踊りが私たちのコミュニケーションです。上下関係なく、ただ一緒にダンスをつくる関係性を大事にしています。観客を含めて、表現を通して他者と通じ合う、エネルギーの循環を楽しんでいます」と語る。公演ではたまたま通りがかった人が足を止めてダンスを最後まで観る姿も多くあった。彼らは上手に踊るわけではないけれど、なぜか惹（ひ）き込まれて見てしまう。ソケリッサは、ふだんの生活や地位や肩書きから離れた、根源的な生への問いかけを全身で投げかけている。

アオキカク
WEB: https://sokerissa.net
SNS: https://www.facebook.com/SOKERISSA

レポート2

un:ten+
女性のエンパワメントを衣服と身体で表現する

素材が持つ回復力を信じる

伊東純子さんは横浜市日ノ出町のアトリエを拠点に、オリジナルブランド「un:ten」(アンテン)として洋服やインスタレーションなど、布を使ったさまざまな作品を制作している。なかでも象徴的なのは「着物服」の制作で、各家庭に眠っている着物をほどき、洋服に仕立て直している。伊東さんは「その着物がもっている面白さを次に着る人に合わせて引き出していきます。使えない、古い、汚れていると言われたものを新しく生まれ変わらせることは、自分のなかではレジリエンス(回復力)だと捉えています。それは私の活動全体に通じる考え方です」と語る。着物をほどくとシミをみつけたり、洗う作業のときに匂いが舞い上がったり、着ていた人の気配を感じるという。着物のもつ物語をどう引き継ぐのか考えることが伊東さんの悩みであり、楽しみだ。

生活から生まれる表現を活かす

un:ten が考えるレジリエンスのもう一つの展開は「un:ten+」(アンテンプリュス)。これは伊東さんがパフォーマンス・アーティストの砂山典子さんや洋裁教室の生徒とともに立ち上げた、女性のエンパワメントを目指すグループだ。2023年8月に行われたキックオフパフォーマンス「OUR SILVER LINING」ではダンス、演劇、朗読とヴァイオリン演奏、スタンダップコメディー等を交えたファッションショーが発表された。砂山さんは「稽古ではメンバーそれぞれがこれまでのキャリアで培ってきたものを共有しました。例えば私はバーレスクダンスの経験を活かして衣装の魅力的な脱ぎ方を教え、教師をしているメンバーには実際の授業を実演してもらいました。女性が生活の中で感じる違和感や不自由さに着目し、メンバーの等身大の思いを軸に創作しました」と語る。

パフォーマンスでは軍服のような衣装が解体され、ドレスに着替える様子が描かれた。その人らしく変身する様子からは女性たちの生きざまを感じられた。生まれ変わる一歩を踏み出すきっかけを「un:ten+」はつくっている。

a.

b.

c.

a. 横浜日ノ出町のアトリエにて。右から伊東純子さん、砂山典子さん。
b.「OUR SILVER LINING」パフォーマンスの様子。女性が銃を持つことの意味を問う。
c.「OUR SILVER LINING」パフォーマンスの様子。着物服をまとっている。

un:ten
神奈川県横浜市中区日ノ出町2-150-502
WEB: https://un-ten.com

レポート3

Murasaki Penguin
コミュニティと芸術を身体から考える

身体を感じられる空間づくり

戸塚駅から降りて歩道橋を渡ると、団地の狭間に多角の建物Murasaki Penguin Project Totsuka(以下、MPPT)が見えてくる。建築家・隈研吾による設計で、半分が保育園、半分が舞台設備を整えたアートスペースだ。建物名にある「Murasaki Penguin」は黒田杏菜とデイビットカークパトリックのふたりのアーティストがダンスや音楽、映像などを織り交ぜて活動するグループの名。ふたりは所有者からの依頼でアートスペースの内部設計から関わり、運営をしている。「舞台面の床にはゴムを入れて足の負担を軽減するなどアーティストの視点から工夫しました。無機質でなく身体性を感じられると好評です」とふたりは語る。また、近くに寝泊まりができるレジデンススペースを設け、海外のアーティストも受け入れている。デイビットさんは「滞在制作で来たアーティストが、近隣の店に通っているうちに地域の人との親交が深まり、MPPTの存在が知られるきっかけになりました。人と人の関わりでまちに芸術文化が少しずつ溶け込んでいる実感があります」と語った。

その場に居合わせた人が融合する表現

今年度、Murasaki Penguinが取り組んだ「Stutter」はコロナ以前とそれ以降の生活について思い返し、表現として捉え直すプロジェクトだ。パフォーマンスでは観客がひとりずつ「コロナ前」「緊急事態宣言中」「現在」のそれぞれの1日について、気持ちの高まりを軸にグラフを描き、それをパフォーマーたちが音とダンスで表現する。黒田さんは「グラフを書く手つきも筆圧もそれぞれ異なります。公演によって緊張感があったり和やかだったり、その場に居合わせる人によってまったく印象が異なりました。過去の時間を思い出しているときの身体には美しさを感じます」と語る。また、会場には10ケ国以上の海外ルーツの方が足を運んだ。自分のルーツとは異なる国で、マイノリティとして暮らした経験から「外国人のアーティストやお客さんが当たり前にいる空間を実現していきたいです」と語るふたり。表現を通して、文化やバックグラウンドの違いが自然に融合する空間のあり方を目指している。

a.

b.

a.「Stutter」の上演風景。
b. Murasaki Penguin Project Totsuka外観。

Murasaki Penguin
神奈川横浜市戸塚区戸塚町4247−21
WEB: https://www.murasakipenguin.com
MAIL: info@murasakipenguin.com
SNS: https://www.facebook.com/murasakipenguin
https://www.instagram.com/murasakipenguin/
https://twitter.com/MurasakiPenguin

取材した活動では、アーティストは指導するのではなく、参加者との関係性を育みながら、それぞれの中にある持ち味を共有することに終始していた。過程は目標のための訓練ではなく、むしろ過程自体に作品の主軸が置かれている。その過程から立ち現れるのは、作為のない身体の美しさや、等身大の言葉。生活と身体を切り離さず、そのつながりを活かす表現は、一人ひとりの生き方を肯定している。

テーマ	音楽で超える、つなぐ ～さまざまな人と音楽を～
ゲスト	小柳玲子さん（音楽スペース おとむすび） 木村有沙さん（しましまのおんがくたい）
聞き手・進行	小川智紀（ヨコハマアートサイト事務局）
収録日時	2023年12月17日（日）
会場	音楽スペース おとむすび

今回は障害の有無にかかわらず、さまざまな人に音楽を通してアプローチする活動を行うおふたりをゲストに、開かれた音楽のあり方を考えました。

木村さんは青葉区民文化センターフィリアホールの親子向けコンサートへの出演をきっかけに「しましまのおんがくたい」を結成。始めは親子向けの活動が中心でしたが、地域コーディネーターのアドバイスを受け「あおば支援学校」で演奏する機会を得ます。そこで障害のある子どもたちがコンサートホールに行きづらい現状や、地域での学校の知名度が低いことを知り、学校での定期的な活動を開始します。演奏やワークショップを繰り返し、改善しながら子どもたちとの関係性を深め、教員の協力のもとホールでのコンサートが実現しました。その後も子どもの特性に合わせた楽器づくりワークショップや、地域の人や卒業生を含めたバリアフリーコンサートを開催するなど、一歩ずつ目標を実現しています。

小柳さんが「音楽スペースおとむすび」を開いた背景には音楽療法士としての経験がありました。それは支援学校や福祉施設の中では音楽ができても、卒業や退院後に音楽を楽しむ機会が地域に少ないという現状です。地域の中で、支援する／されるにかかわらない関係の中で、音楽を楽しむ場をつくりたいと考えた小柳さんは、同じ気持ちをもつ仲間を集めクラウドファンディングを行い、スペースを開設しました。地域とのつながりを少しずつ築き、現在では障害のある人も、音楽にハードルの高さを感じていた人も、また年齢や経験にかかわらず多様な人たちが、今自分ができることを持ち寄って音楽に参加する場になっています。

ディスカッションでは音楽が人をつなぐことを信じて活動しつつ、同時にそれが押し付けになっていないかを常に考えることの重要性が挙げられました。身内での活動にならないよう視野と間口を広げ、資金調達を含め今後の展開につなげたいと語りました。

右から、小柳さん、木村さん、小川

ヨコハマアートサイトラウンジとは
地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図ることを目的とし、横浜というまちでアートと地域の関わりについて考える交流と研修の場です。

左、右上：ワークショップ風景
右下：完成写真

～アートから伝える共生社会～

寄稿：**和田 剛**

横浜ラポール文化事業課の和田剛さんに
障害の有無を超えたアートによる取組みについて伺いました！

障害者スポーツ文化センター横浜ラポールと、ラポール上大岡は障害のある方がスポーツやレクリエーション、文化活動を通じて、健康づくりや社会参加を進めるとともに、障害の有無を超えた市民相互交流をはかる場として設置された施設です。

新型コロナウイルス感染防止の措置も少しずつ緩和され、当館の利用者も徐々に増え、活気も戻ってきたように感じます。

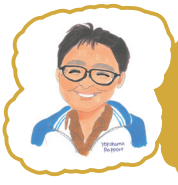
そのようななか、スタートしたプログラムが「アートワークショップ」です。縦1.8メートル、横10メートルの大きなキャンバスに、参加者と横浜在住でプロとして活動しているペインターのKensuke Takahashiさんが一つの絵を描くプログラムです。参加者や家族、ペインターは一緒に好きな色で思い思いに絵を描きます。筆だけではなく、手のひらや顔など全身を使って描き、終わる頃にはキャンバスも身体も色鮮やかになっています。

最後にペインター自身が感じた子どもたちの純粋さや、個性豊かな表現方法で描かれた作品のイメージを膨らませ、当日の参加者の熱気を表す躍動感のある恐竜をモチーフにした大きな絵が透明なカラーで描かれます。

完成した作品は、横浜市役所や大さん橋国際客船ターミナルなど横浜市内各所で展示され、多くの方の目にふれる機会も設けており、参加者から「自分が描いた絵がこんな場所で展示されるなんて！」と言った声もいただいております。

全身を絵の具だらけにして自分よりも大きなキャンバスに絵を描くことも、プロとして活動されているアーティストと一緒に実際に創作活動ができることも「非日常」の体験であり、障害の有無にかかわらず作品を通して一つになるプログラムは「共生社会」に向けた取組みといえるかと思います。

今後も共生社会の実現に向け、このようなプログラムを両施設で展開していきたいと考えています。



和田 剛

わだ たけし　障害者スポーツ文化センター横浜ラポール文化事業課長
障害者スポーツ文化センターラポール上大岡管理運営担当課長

一般企業の営業職を経て、2001年より社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団に入職。障害者スポーツ文化センター横浜ラポール文化事業担当を経て現職。障害者の芸術発表の場である「横浜ラポール芸術市場」をはじめとした障害者の文化振興および余暇支援事業を展開している。令和5年度神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター協力委員。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

10月13日金曜日
横浜市中央図書館での展示「ジャズ喫茶ちぐさの90年」へ。ジャズ喫茶とは珈琲を飲みながらジャズを楽しむ空間で、1960年頃にブームとなった。1933年にオープンした「ちぐさ」は現存する日本最古のジャズ喫茶。会場には初代ちぐさ室内を再現したコーナーもあり、当時の雰囲気を感じながらジャズ文化にふれた。

12月22日金曜日
横浜市旭公会堂で「あっぱれフェスタ2023」。会場には旭区の福祉事業所の人たちが集い、手づくりのお菓子や手芸品を販売。「第10回D-1グランプリ」では、各事業所の5チームが舞台作品を披露した。利用者・スタッフ・アーティストの協働による作品は演劇、ダンス、歌などさまざま。人間性が伝わるパワフルな舞台は圧巻。

12月23日土曜日
「OUTBACK アクターズスクール第3 回横浜演劇公演」をあかいくつ劇場で。演劇作品「愛と変容についてのラップバトル」「スナック青い鳥」の上演と精神科医によるトークという内容。演劇では精神病院やスナックを舞台に、精神疾患当事者が実体験に基づいた内容をラップや歌を交えて表現した。クリスマスの横浜で会場は大盛りあがり。

3月1日 金曜日
ヨコハマアートサイト2024の募集を開始しました。地域課題に対して文化芸術のもつ創造性でアプローチし、地域コミュニティに寄与する取組に助成します。助成金額は1 件あたり10~200万円です。みなさま、ぜひご応募ください。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

横浜のアート活動を応援する助成金
ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site
申請受付期間 2024年 3月1日(金)～4月3日(水)まで

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題に対して文化芸術の持つ創造性でアプローチし、地域コミュニティに寄与する取組を支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人 STスポット横浜、横浜市にぎわいスポーツ文化局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜ST ビル B1F（認定NPO 法人ST スポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410　FAX:045-325-0414　MAIL:office@y-artsite.org　WEB:https://y-artsite.org
SNS :https://twitter.com/Y_Artsite　　https://www.facebook.com/yokohama.artsite

季刊ヨコハマアートサイト vol.038
発行：ヨコハマアートサイト事務局　編集：認定NPO法人 STスポット横浜　編集協力：大谷薫子　取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子　撮影：岡本千尋（表紙、レポート1_a~c）、松本和幸（レポート3_a）、堀越圭晋［SS］（レポート3_b）　印刷・製本：共進印刷株式会社
発行日：2024年3月31日　季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。